

公益財団法人 檜の芽会 御中

令和 7 年度伴走型就学・学習支援活動助成 実施報告書

【団体の概要】		① 作成日	令和 8 年 5 月 25 日
② 法人・団体名	一般社団法人彩の国子ども・若者支援ネットワーク		
③団体所在地 (都道府県・市町村名まで)	埼玉県さいたま市浦和区高砂		
④責任者氏名	土屋 匠宇三	(役職名等)	代表理事
⑤担当者氏名	竹林 志保	(役職名等)	本部事務担当

【奨学活動の概要】

⑥助成交付決定番号	R07-010	⑦助成金額	150 万円	⑧申請カテゴリー	DS
⑨奨学活動名	埼玉県における生活困窮世帯の学習支援				
⑩主な実施場所名・ 及びその住所	春日部・越谷市・上尾市・桶川市・北本市・鴻巣市・狭山市・入間市・蓮田市・白岡市・久喜市など 26 市および全 23 町村部をカバーする合同教室				

⑪活動内容とその成果の概要（詳細は【様式 3 - 2】又は別添資料にて記載・説明ください。）

- ・生活困窮世帯の中学 3 年生を対象に高校入試対策の強化を目的として、自治体から委託された開催枠に留まらずアスポート学習教室（通称：特別教室）を開催した。
- ・特別教室の参加人数は⑫のとおりで子どもの進学に対する真剣な状況がうかがい知れる。
- ・活動の成果として、本庄の教室を利用していた高校 3 年生の男子生徒が千葉大学薬学部に合格した。生活保護世帯で、困難な家庭環境の中、本生徒は強い明確な意志のもと勉学に励み、学習教室を通じて頼れる大人を見つけ自分を信じて学習することで第一志望合格をつかみ取った。
- ・購入した主な物品は、学習テキストや問題集のほか、実験授業の際に使う材料・道具類である。
- ・参加状況から特別教室は中学 3 年生のみならず大学・就職を考える高校生や進学を見据えた中学 1・2 年生にとっても有効な機会として働いたことがわかり、いっそうの取組みに努めたい。

⑫奨学活動の定量的把握（注：統計情報として参考まで把握するものです。活動成果等は上段⑪及び様式 3 - 2 等でご報告願います。）

支援対象	延べ人数 (A : 人)	平均時間 (B : 時間)	活動量 (A x B)	備考・補足・計算根拠等
中学生等	698	2.5	1,745	
高校生等	138	2.5	345	
大学生等				
学習支援員等				
その他				
合 計			2,090	

⑬その他の定量的な数値（任意）

令和 7 年度伴走型就学・学習支援活動助成 実施詳細報告書

奨学活動名：埼玉県における生活困窮世帯の学習支援

法人・団体名：一般社団法人彩の国子ども・若者支援ネットワーク

作成者 氏名：竹林 志保

1. 取り組んだ課題や実践した目的・実施内容について

学習塾等では受験対策として夏期講習や冬期講習、合宿等が実施される。生活困窮世帯等では塾や家庭教師にかかる経済的余裕がないため、一般世帯との情報格差や学力格差が生じがちで高校入試において不利な状況に置かれている。当法人での支援経験では、生活困窮世帯の子どもや保護者が将来に対して不安を募らせるケースが多く見られた。以上の理由から、長期休暇や受験直前期に自治体からの委託の枠を超えた追加の学習教室（特別教室）を開催し、子どもの学力向上を図り世帯の不安を軽減する支援を前年に継続して実施した。

- ・対象：生活困窮世帯の中学 3 年生
- ・内容：主として埼玉県立高校の入試対策の指導

子どもの学力・特性にあわせた学科試験対策＝「集団指導」と「個別指導」組み合わせ

集団指導…職員や元教員（有償ボランティア）が講師を務める講座

個別指導…大学生を中心とした無償ボランティアが各子どもについて指導

2. 実施した奨学活動の詳細

・活動内容の詳細

特別教室実施例	概要
①宿題特別教室	・宿題の提出は内申点に反映され高校入試の可否に影響するため ・夏期・冬期休暇中に開催 ・1対1または1対2でボランティアが個別指導 ・教材は、自力で終わることができなかった宿題を子どもが持参
②国語特別教室	・元高校国語科教員の職員が講師となり、作文講座を実施 ・講師自身の問題作成経験と採点経験をもとに、入試作文で重視されるポイントを解説 ・減点対象となる書き方について ・入試作文で出題されるデータの読み取り方 ・実践演習と講師による添削 ・作文講座に加え、一部の学習教室では古典分野の現代的仮名遣い等、基礎的な知識に関する講義
③数学特別教室	・数学については子どもの学力差が顕著であるため、講義形式ではなく個別で一人ひとりのレベルに合わせた指導を行った ・埼玉県立高校入試で毎年出題される単元について、職員や元教員らがプリントを作成し配布した ・極端な低学力の子どもに対しては、小学校の内容（四則計算、小数、分数）の復習を行った上で、文字式、方程式、平方根、因数分解、連立方程式、二次方程式等の得点源になる問題だけを抽出して反復練習を行った

(特別教室の様子)



・参加人数

【様式 3-1】⑫のリストに記載

・周知方法や協力いただいた関係者・地域やボランティア活動との連携・学習支援員（職員）について

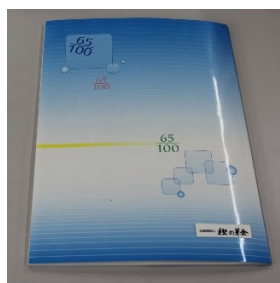
周知方法：チラシやお手紙を学習支援員から学習支援対象者に説明して手渡ししている

通常教室・特別教室ともに社会人および学生ボランティアの参加なくしては成立しない

特別教室では特に元教員による講義や専門的な個別指導が大きな力として働いている

・購入した機材・物品の写真（助成表示用シールの貼付）

（教材）



3. 本活動から得られたもの、反省点、課題、今後への発展性、等

本活動での支援の甲斐あって、今年度もアスポートから407名の中学3年生のうち405名が県立高校をはじめとした高校に合格することができた。進学ができなかった2名については、お金がないので働いてほしいと親に言われた子と、出産を決意した子については進路未定まままだ家にいる状態であり、引き続き支援をしている。

当法人では進学が困難な子どもたちへの進学支援をすることで貧困の連鎖を断つものであるが、一人一人に焦点をあてれば、すべての子どもが受験時には自分の将来を不安に思い支えを必要としている。本助成では、行政委託からのリソースの多くを困難そうにってしまう中、中上位の子どもたちへの支援も欠かさずに行いたいとの思いで特別教室を行った結果、進学を希望した子どもたちへのより良い支援が行えたと考えている。

そのような姿を見て中学1・2年生が未来の自分に重ね、自発的に特別教室に参加するという流れも生まれた。

さらに令和5年から続くこの取り組みは高校進学目標を達成した子どもが、その先にある大学進学や就職にまで夢をつなげていくことにも貢献している。

これらの事実により、受験生向けの特別教室を開催することで、学年の壁を越えて子どもたちの学習意欲や学力を向上させることが実現できるという確信となった。

いっぽうで登校できない子どもも一定数存在しており、そうした子どもたちには受験まで学習教室ではなく家庭訪問による個別学習をおこなっている。彼らには大人にかかわりあいながら努力し、仲間の様子によい刺激を受けながら学びあう世界へといざないたい。そのために大人と子どもとの信頼関係を早期から構築して徐々に学習教室への参加を促し、ぜひ特別教室へ参加できるよう努めたい。

4. 本活動におけるエピソード、思い、感想、等（任意）

◆エピソード

本庄の教室を利用していた高校3年生の男子生徒が千葉大学薬学部に合格した。

生活保護世帯で、家族構成は父・母・長女・次女・本生徒である。父親は鬱症状があり、長女は不登校、次女は自律性障害という困難な環境だったため家族ごとアスポートでサポートしていたが、父親の醸し出す空気は大変重く暗い雰囲気の家だったと当時を知る支援員は振り返る。家庭には学びに対する理解やリスペクトが皆無だった。

この中でも本生徒は強い明確な意志のもと勉学に励み、県内屈指の公立高校に入学、その後も努力を怠らなかった。

学習教室においては子ども1名に対し学習支援員、元教員の学習指導員、社会人や学生ボランティアによる試験対策の指導や相談等のきめ細やかで手厚い支援をおこなった。本生徒は自らも「信頼できる大人に頼る」ことができるまでに成長し、高校の先生にも教えを請いながら、第一志望合格をつかみ取った。

子どもが大学受験に頑張る様子を間近で見ていた父親はいつしか次第に進学に理解を示すようになっていた。それと同時に家庭も徐々に明るいものとなってきた。

この経験は特別教室に参加した中学3年生のみならず大学・就職を考える高校生や進学を見据えた中学1・2年生にとっても価値のある未来を切り開くことができるという希望の光に映るものである。また教室に関わった大人にとっても、充実した学習教室の取組みに努めたいという思いが一層強くなったできごとになった。

5. 学識者からのご意見、コメント、等（申請カテゴリーにて「S」が付されている団体）

すべての子ども達の進路希望を充足させたい。そのためには、さまざまに異なる子どもたちの生育環境、進路内容に対応できる支援活動が要求される。しかし、投入可能な資源が限定されるために、支援の範囲は限られ、有限な資源をどう配分するかは災害時における救命救急と同じように悩ましい。「全員に思い届けたい」気持ちと、法人の特性や助成条件による支援の優先順位を決めざるを得ないことの矛盾である。

助成金は、当法人がかかわる 1,700 名を超える子どもたちへの支援の中で、進学を望む中学校 3 年生の入試にむけた学習指導に特化された事業にあてられた。従来、法人のリソースは、生活困窮世帯の学習支援全般にあてられてきたことと入試準備のための学習に特化した支援活動に充当できる余裕をもてなかった。助成金によって、昨年度よりも約 100 人多い高校進学希望 405 名に対して「特別教室」を実施し、その全員が高校入試合格を果たすことができた。この成果は、中学 3 年生に自分の人生が大学進学や就職につながる夢を抱かせるとともに、中学校 1・2 年生の学習意欲を高める効果も生んできている。また、特別教室参加の中から、これまで、国立大医学部の合格者、今年度は千葉大薬学部合格者を生み出しただけでなく、受験生の家庭環境をも明るくしていくという成果をもたらしている。これらの事実は、県内の学校教育の中でも驚異的な成果といえよう。

子どもたちの将来を切り開ける上級学校への進学は、それ相応の条件整備によって可能性を大きく拡大することができることを示しているといえよう。こうした子どもたちの可能性を実証しながらも、本助成の性格上、次年度以降の事業継続にむけてはまだ課題がある。新たな資源を生み出し、事業継続するためには、法人のさらなる努力が期待される。

山口 和孝（埼玉大学名誉教授）